別紙様式３

平成25年度　博士前期課程学位論文要旨

末期がんの作業療法におけるクライエントの語りを捉えるプロセス
～作業療法士19名へのインタビューデータの分析～

学位の種類：　修士（作業療法学）
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　作業療法科学域
学修番号　12896604
氏　名：佐藤　早希
（指導教員名：石井　良和　教授）

注：1ページあたり1,000字程度（欧文の場合300ワード程度）で、本様式1～2枚（Ａ４版）程度とする。

はじめに，末期がんのリハビリテーションの目的は，余命の長さにかかわらず，クライエントとその家族の要求を十分に把握したうえで，出来る限り可能な最高の生命の質を実現することである．しかし実際は，末期がんを患ったクライエントの語りを捉えて作業療法実践へ繋げる評価や方法が十分確立しているとは言えない現状である．

本研究の目的は，末期がんを患ったクライエントに対する作業療法実践のプロセスを明らかにすることである．

方法は，作業療法士（以下OTR）19名へのインタビューデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し，クライエントの語りを捉えて作業療法を進めていく過程をカテゴリー化した．

結果，生成された概念は22概念，カテゴリーは11カテゴリー（以下【】で表す）であった．結果図から，“語り”を得る基盤ができ，“語り”を捉えて協業していくプロセスが明らかとなった．通常末期がんを患ったクライエントのADL能力は病状進行と共に急激な下降線を辿るが，本研究では病状が進行してもだんだんと築かれていく構造体があると示された．

“語り”を得る基盤となっているのは【1.“いま”への態度】であり，【3.“語り”を得る】際，クライエントが病状変化に対して語り直しを迫られ，傍にいたOTRが聴き手となると考えられた．また，OTRがクライエントの“いま”を捉え，作業歴を知るというプロセスを踏むことは，クライエントがいま現在“何者かであろうとする”自身の同一性を確認する一助になった可能性がある．そのためOTRは，自身がクライエントにとっての“他者”（という相手）になり得ると自覚しておくことが重要である．末期がんにおける作業療法は，現在明確に作業療法と明記されていない【9.新たな構造体】を生み，【10．閉ざされた医療現場】ではなく〈臨床〉という新しい枠組みに位置するものであると考えられる．